

アブヌワスには隣人がいました。そして彼はその隣人の行いは良くないと思っていました。毎日、その隣人は他人を困らせるようなことを行っていました。そこでその日、アブヌワスは彼のところに行き言いました。「鍋を貸して欲しい。パーティーがあるのだ。あなたのところの鍋はこれくらい大きいですよ。パーティーがあるんだ。」すると、隣人は鍋を渡しました。アブヌワスは家に戻りました。2、3日経ってからアブヌワスは別の小さい鍋を隣人の鍋の中に入れ、彼に返しに行きました。隣人は喜びそれを受け取ると「でも、なんで別の鍋が入っているんだ、これは君のじゃないのか」と言いました。アブヌワスは言いました。「いや、あなたの鍋が我が家にいる間に生んだのだ。だからこれはその鍋の子どもだ。だから鍋の持ち主であるあなたのところに持ってきた。」すると隣人はとても喜びました。しばらく経ってから、アブヌワスはまた鍋を貸してほしいと頼みに行きました。隣人は、次は鍋が双子を生むかもしれないと喜びました。アブヌワスは帰って行きました。ずいぶんと経ってから「アブヌワス、私の鍋はどうなっている？なぜ、戻さないのだ。」と尋ねに行きました。アブヌワスは言いました。「残念なことに鍋は死んでしまったんだ。」「え？おまえ、鍋が死ぬって？」アブヌワスは言いました。「そうだ、死んだんだ。」「鍋がどうやって死ぬというんだ。」隣人はアブヌワスと喧嘩を始めました。そしてアブヌワスは言いました。「鍋は生まなかったか？生むものは、いつかは死ぬんだ。だからあなたの鍋も死んだ。もうないんだ、死んだんだよ。」